

上博楚簡『融師有成氏』における冒頭の一文について

西山 尚志

はじめに

1994年、香港の骨董市場から発見されて上海博物館が買い戻したいわゆる「上博楚簡」は、寫眞圖版と釋文が附され、2001年11月に馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』として上海古籍出版社から出版された。そして同書は現在までなお出版を續けており、第五卷には『融師有成氏』と名付けられた文獻が収められているⁱ。この『融師有成氏』は、同じく第五卷に所収されている『鬼神之明』という出土文獻と竹簡が繋がっている。同書第五卷所収『融師有成氏』の整理者である曹錦炎氏（以下はこの原釋文を「曹錦炎」と略す）によって、第一號簡から第五號簡までが『鬼神之明』、そして「■」という文末記號を挟んで、同じ第五號簡から第八號簡までが『融師有成氏』として分斷されているⁱⁱ。『鬼神之明』は墨家と深い關係がある文獻であり、「今夫梟（鬼）神又（有）所明、又（有）所不明（今夫れ鬼神に明なるところあり、明ならざるところあり）」という命題について論じるものである。一方、『融師有成氏』は極めて難解であるためなお不明な點が多いが、祝融の師に關する内容が論じられているものであり、「類（類）獸（獸）非鼠（獸（獸）に類（類）すれども鼠にあらず）」といったような半獸的人物が登場する文獻である。恐らく、『鬼神之明』と内容上の關係はほとんどないと言ってよいだろう。

さて、この『融師有成氏』であるが、その内容は近年陸續と公開されている郭店楚簡・上博楚簡といった中國先秦思想出土文獻の中でも、屈指の難解な出土文獻の一つと言っても過言ではない。殘缺部分もある上に、文字學的にも待考とすべき點が多い。そこで、本稿でもその内容の全體像は待考としたい。しかし、全容解明の爲に一步でも前進させるためには、批判を懼れず

に大膽な推測も交えて検討する必要がある。本稿では『融師有成氏』解讀の足がかりとして、最も重要と考えられる冒頭第五號簡の「鞞帀又成氏廂若生」という一文の読み方について推論を打ち出したい。

第一節 『融師有成氏』冒頭の一文中における基本的な問題點

すでに述べた通り、本稿は上博楚簡『融師有成氏』冒頭における「鞞帀又成氏廂若生」という一文の読み方について検討するものである。本節では、この『融師有成氏』冒頭の読み方における問題點を挙げる。しかし、その前にまずはこの一文の読み方に對し、諸説共通している點を挙げる。

それは、「鞞帀」という冒頭の二字である。まず、「鞞」は「融」と讀む。當該字と同様の字形は、「曹錦炎」も指摘している通り、望山一號墓楚簡一二三號簡、包山楚簡第二一七號簡・第二三七號簡、楚帛書甲七五に見える。これらのうち、包山楚簡第二一七號簡・第二三七號簡、楚帛書甲七五の三例は、「祝鞞」という用例の中で見られる。「祝鞞」は中國古代傳説中の人物である祝融のことである。よって、當該字も「融」と讀み、祝融を指すものと考えられる。

次に「帀」であるが、「帀」は「師」の省字または假借字であろう。「曹錦炎」も同じく「師」と讀んでいる。

よって、「鞞帀」は「融師」と讀み、「祝融の師」という意味と考える。祝融に關しては、『史記』楚世家に、

楚之先祖出自帝顓頊高陽。高陽者、黃帝之孫、昌意之子也。高陽生稱、稱生卷章、卷章生重黎。重黎為帝嚳高辛居火正、甚有功、能光融天下、帝嚳命曰祝融。共工氏作亂、帝嚳使重黎誅之而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎、而以其弟吳回為重黎後、復居火正、為祝融。

とあり、『山海經』海内經に、

炎帝之妻、赤水之子聽訞生炎居、炎居生節並、節並生戲器、戲器生祝融。などとあるような中國古代傳説上の人物である。しかし、中國古典文獻中で「祝融の師」などといった表現を使っている用例は見あたらない。この『融

師有成氏』が難解である理由は、まさにこのようなところにあるのである。

いずれにせよ、ここまでの「韃帀」の読み方に関しては諸説一致しており、本稿もそれに従うこととする。しかし、この「韃(融)帀(師)」の後文をどのように読むかは諸説紛糾している。主な争点は以下の二点に絞られよう。一点目は、「韃(融)帀(師)又成氏廋若生」という文をどこで切るかという問題である。そして第二点目は、「生」をどのように読むかという問題である。以下は主にこの二点を検討し、『融師有成氏』冒頭の「韃帀又成氏廋若生」という一文の読み方について試論を打ち出したい。

第二節 『融師有成氏』冒頭の一文の断句について

上述した通り、本節では「韃帀又成氏廋若生」という文のどこで讀点を切るかという問題を検討したい。

まず、「又成氏」の読み方について検討する。そもそも原釋文の作成に当たった「曹錦炎」からして読み方の説を二つ挙げている。一つは「有仍氏」と讀むものであり、もう一つは「容成氏」と讀むものである。

そこで、まずはこれを「有仍氏」と讀む説を検討してみよう。「曹錦炎」は、「成」は禪母耕部・「仍」は日母蒸部に属しているため通假可能であるとしている。しかし、實際は韻部がかなり離れていることに注意すべきである(聲母は同じ舌頭音)。なお「有仍氏」についての古典文献中における用例は、『史記』吳太伯世家に、

伍子胥諫曰、昔有過氏殺斟灌以伐斟尋、滅夏后帝相。帝相之妃后緡方娠、逃於有仍而生少康。少康爲有仍、撫其官職。使人誘之、遂滅有過氏、復禹之績、祀夏配天、不失舊物。……

とあり、『春秋左氏傳』昭公二十八年に、

昔有仍氏生女、黥黑而甚美、光可以鑑。名曰玄妻。樂正后夔取之、生伯封、實有豕心、貪惓無厭、忿類無期、謂之封豕。有窮后羿滅之、夔是以不祀。

とあり、『竹書紀年』卷上の帝相に、

二十八年、寒浞使其子澆弑帝、后緡歸于有仍。

とある。これらの「有仍氏」は、「有仍」という地名の氏族を指しているため、ある人物を特定することはできない。またこれらの説話は、いずれも夏王朝時代に關するものと考えられる。『春秋左氏傳』の説話では、羿によって有仍氏が滅ぼされたとしている。羿に關しては、文獻によって時代設定に違いがあるが、『史記』夏本紀では夏王朝太康時代の人物として登場するので、この『春秋左氏傳』の説話も夏王朝時代のものとしているのかもしれない。よって、この「有仍氏」を、伏羲・神農や共工氏などほとんど神話時代の人物である祝融の「師」とすることは到底受け入れられない。

では、「又成氏」を「容成氏」と讀爲する説を検討してみよう。ちなみに、この「又成氏」を「容成氏」と讀爲することを支持している研究者は、今のところいないということをおそらく述べしておく。「容成氏」は、上海博楚簡『容成氏』第五十三號簡背では「訟城氏」に作っており、「容成氏」と讀爲している。下に引いた『莊子』胠篋篇では「容成氏」に作っているが、『六韜』大明篇（佚文）ⁱⁱⁱのように「庸成氏」に作っているものもある。音に關しては、「訟」は邪母東部、「容」は餘母東部、「訟」の聲符である「公」は見母東部、「庸」は餘母東部にそれぞれ屬している（郭錫良『漢字古音手冊』^{iv}を参照）。なお、「公」を聲符にした文字（例えば「頌」や「忝」）と「容」との通假例は古典文獻中に存在する（『古字通假會典』^v 8頁参照）。また、「又」は匣母之部であり、聲母は「訟」「公」「容」「庸」と關係づけられそうではあるものの、韻部が合わない。ちなみに、「容成氏」を祝融の師とすることについては、『莊子』胠篋篇に、

子獨不知至德之世乎。昔者容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏羲氏、神農氏、當是時也、民結繩而用之、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、鄰國相望、雞狗之音相聞、民至老死而不相往來。

とある。この例を見る限りだと、「容成氏」を祝融の師とするのは無理な時代設定というわけでもなさそうである。

このように、「又成氏」を「有仍氏」或いは「容成氏」と讀むことの共通

點は、いずれも「氏」を如字で讀爲して、「氏」を氏姓の意と解しているところにある。だが、「又成氏」を「有仍氏」・「容成氏」と讀むいずれの説も、根拠がやや薄弱であるのは否めない。

これに對し、單育辰「上博五短札（三則）」^{vi}（以下、しばしば「單育辰」と略す）はこれらの讀み方とは別の説を唱えている。まず、「單育辰」の説を紹介する前に、『融師有成氏』冒頭の「韃帀又成氏廂若生」の後文を以下に擧げておく。

又（有）耳不聞（聞）、又（有）口不鳴（鳴）、又（有）目不見、又（有）足不趨（趨）。名則可畏（畏）、步則可侮（侮）。

（耳又（有）れども聞（聞）こえず、口又（有）れども鳴（鳴）かず、目又（有）れども見えず、足又（有）れども趨（趨）らず。名は則ち畏（畏）るべし、步（實）は則（則）ち侮（侮）るべし）

「單育辰」の讀點の切り方は「曹錦炎」とは異なり、「韃（融）帀（師）又（有）成、氏（是）廂（状）若生」としている。つまり、「氏」を「是」と讀んで「氏」字の前で句點を切っている。「單育辰」も指摘する通り、本篇第七號簡の「昔韃之氏帀」は「昔韃（融）之氏（是）帀（師）」と讀まれていることを考えても、「氏」を「是」と讀むのには問題がない（古典文獻中における「氏」と「是」の通假用例は、前掲『古字通假會典』461頁参照）。「單育辰」が「氏」字の前で讀點を切る根拠としているのは、以下の二點である。

- ①本篇はおおまか四字句で構成されており、「氏」の後ろで讀點を施せば、この文章が四字句になる^{vii}。
- ②「成」「生」「鳴」は耕部、「趨」「侮」は侯部に屬し、文章の脚韻という観点から見て適當である^{viii}。

「單育辰」の説に従えば、この文の押韻關係は以下の通りとなる。

融師有成、氏（是）状若生、有耳不聞、有口不鳴、有目不見、有足不趨、名則可畏、步則可侮。（○は耕部、●は侯部）

この「單育辰」の説には、十分な説得力がある。よって、「氏」字の後ろで文を切るものと考え、「氏」も「是」と讀爲すべきであると考え。なお、

「曹錦炎」がこの出土文獻を『融師有成氏』と名付けたのは、この冒頭の一文を「氏」字の後で切って「又成氏」を人名と解したからであろう。しかし、筆者はこの觀點から、『融師有成氏』という命名はやはり不適當であつたと考える。いずれにせよ、混乱を避けるために本稿では引き続き『融師有成氏』という篇名を用いることとする。では次節では、「韃（融）市（師）又成、氏（是）狎若生」の「又成」と「若生」の読み方について検討したい。

第三節 「若生」と「又成」について

上述した通り、本節では『融師有成氏』冒頭の一文的「又成」と「若生」の読み方について検討する。

「若生」の「生」は、「曹錦炎」は如字で読み、「出生」の意としている。廖名春「讀『上博五・融師有成氏』篇札記四則」^{ix}（以下、しばしば「廖名春」と略す）はこれに反対し、「狷」と讀爲している。また、李銳「讀上博五札記」^x（以下、しばしば「李銳」と略す）は「眚」と讀んでいる。なお、「廖名春」の説を引用すると以下の通りである。

『逸周書』王會「都郭生生、欺羽。生生若黃狗、人面、能言。」『山海經』海內南經「狷狷知人名、其爲獸如豕而人面。」郭璞注引『周書』作「狷狷」。『玉篇』犬部「狷、狷狷。如狗、面似人也。狷、同狷。」『山海經』南山經「（招搖之山）有獸焉……其名曰狷狷。」『爾雅』釋獸「狷狷」作「狷狷」。『山海經』海內南經「汜林方三百里、在狷狷東。」郭璞注「「狷狷」或作「狷狷」、字同耳。」『禮記』曲禮上「狷狷能言、不離禽獸。」陸德明『經典釋文』本作「狷」、云「「狷」、本又作「狷」。」簡文「融師有成氏、狀若生」、是說「融師有成氏」様子長得象狷狷。下文說「類獸非鼠」・「象彼獸鼠」、皆因「狷狷」「面似人也」、與一般的動物不同、是最接近人類的。

『融師有成氏』冒頭の一文的後文には、「又（有）口不駟（鳴）」とある。「鳴」は鳥獸などに對して使うことばと考えられるので、確かに「廖名春」の説には一定の説得力がある。しかし、「狀如狷」であるのは、後文の「又（有）耳不聞（聞）、又（有）口不駟（鳴）、又（有）目不見、又（有）足不趯（趣）」と必ずしも文章が有機的に繋がらない。「李銳」の「眚」（目の病

氣)と讀む説は、「又(有)目不見」に合わせたものであろうが、牽強附會であろう。筆者は「曹錦炎」の説と同じく「生」と讀み、「出生」の意と考える。なお、当該部分と類似する表現は『大戴禮記』本命篇に、

人生而不具者、五。目無見、不能食、不能行、不能言、不能化。

とある(これと類似する文章は、『韓詩外傳』卷一・『説苑』辨物篇・『孔子家語』本命解篇にも見られる)。この『大戴禮記』本命篇の文章も、生まれたての状態は目が見えない、食べるができない、などといった状態であり、この『融師有成氏』の表現とぴったり合う。よって、この「若生」は「生まれたてのようなもの」という意で解釋すべきであると考え。『融師有成氏』の主役が禽獸のようなものであることは、「廖名春」の指摘する通りである。『融師有成氏』で「鳴」ということばを使っているのは、上學の『大戴禮記』本命篇のような文章の、「人」ではなく「禽獸」に合わせたタイプと解すことができよう。

それでは、その前文の「又成」とはどのように讀むべきだろうか。古典文獻中での「有成」という用例は、その多くが「成功する」・「立派に成し遂げる」といったような意味である。少しだけ例を挙げると、例えば『論語』子路篇に、

子曰、苟有用我者、期月而已可也。三年有成。

とあり、『呂氏春秋』有始覽の諭大篇に、

昔舜欲旗古今而不成、既足以成帝矣。禹欲帝而不成、既足以正殊俗矣。湯欲繼禹而不成、既足以服四荒矣。武王欲及湯而不成、既足以王道矣。五伯欲繼三王而不成、既足以為諸侯長矣。孔丘墨翟欲行大道於世而不成、既足以成顯名矣。夫大義之不成、既有成矣已。夏書曰、天子之德廣運、乃神乃武乃文。故務在事、事在大。

とあり、『春秋左氏傳』襄公三十年に、

子產爲政、有事伯石、賂與之邑。子大叔曰、國皆其國也。奚獨賂焉。子產曰、無欲實難。皆得其欲、以從其事、而要其成。非我有成、其在人乎。何愛於邑、邑將焉往。

とある。しかし、このような「成功する」・「立派に成し遂げる」という意味では『融師有成氏』の文脈とは合わない。

そこで、筆者はこの「若生（生まるるが若く）」に合わせて、この「又成」を「成る又（有）る」と読み、「生成する」という意味ではないかと推測する。この文頭の一文の後には、第七號簡・第八號簡に「昔韃（融）之氏（是）帀（師）、訶（研）尋頭（夏）邦。蚩蚩俊（作）兵、𠄎𠄎（聞）壘（適）易（湯）」（昔韃（融）の氏（是）の帀（師）たるは、頭（夏）邦を訶（研）尋す。蚩蚩は兵を俊（作）り、……𠄎𠄎（聞）壘（適）易（湯））とある。この中の「蚩蚩」（文獻によっては「蚩尤」に作る）とは、これと類似する表現として『山海經』大荒北經に、「蚩尤作兵、伐黃帝。」とあるように、黃帝と戦ったことで有名な神話上の人物である。

また、この後文に「𠄎𠄎（聞）壘（適）易（湯）」とある。この「易（湯）」は桀を討ち殷王朝を興した湯王のことであろうが^{xi}、祝融や蚩蚩の時代とはかなり時間的な差がある。よって、「蚩蚩作兵」と「𠄎𠄎（聞）壘（適）易（湯）」の間の殘缺には、もしかしたら本來かなりの字數があつて、この間に他の登場人物が出てくるのかもしれない。いずれにせよ、「祝融の師」や「蚩蚩」が登場する神話時代から殷王朝の開祖である湯王までの長い時代について書き及んでいることを考えれば、この『融師有成氏』とはかなり長い時代を書き記す性質の文獻であることが推測できる。よって、本稿が取り扱う「韃帀又成氏𠄎若生」という一文は、長い時代を書き記す文章の冒頭として、「韃（融）帀（師）」という人物が「生成」するところから書き始めたのではないだろうか。

おわりに

以上、本稿では上博楚簡『融師有成氏』冒頭の「韃帀又成氏𠄎若生」という一文の読み方について考察した。その結果、この一文は、「韃（融）帀（師）成る又（有）るに、𠄎（狀）は生まれたるが若し」と読み、「祝融の師が生成するに、そのかたちは生まれたばかりのようである」という意味であ

ると解釈した。つまり、この『融師有成氏』という文獻は、傳説時代から(少なくとも湯王まで)の歴代の人物の事跡を記述したものと考え、その上で、その冒頭の一文では「祝融の師」が生成した様子から説き起こしたのではないかと推測した。

しかし、その中で一つ大きな問題が残っている。それは、「鞮(融)帀(師)」つまり「祝融の師」とは、具體的にどの人物を指しているのであろうか、という問題である。これには大膽な推測を基礎に、多くの考證が必要となるであろう。煩瑣を避けるため本稿では論じなかったが、改めて別の機會を待つて論じたいと思う。

本稿は、筆者の口頭発表「上海博楚簡『鬼神之明』・『融師有成氏』を読む」(上海博楚簡研究會、2006年7月6日、於日本女子大學)の成果を基礎としている。そこでは多くの参加者の方々から有益な意見を頂戴した。特に本稿は、本研究員の井上亘先生から何気なく頂いたアドバイスがヒントになった。もとより、本稿の文責は筆者に歸するものであるが、文末ながらここに深甚なる感謝の意を表したい。

-
- i 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(五)』(上海古籍出版社、2005年12月)
ii 『融師有成氏』は第八號簡で終了しているが、第八號簡の簡末は殘缺している。よって第八號簡でその内容が終了しているわけではなく、その後もこの話は續くものと考えられる。
iii 周鳳五「太公六韜佚文輯存」(『毛子水先生九五壽慶論文集』、臺灣幼師文化事業公司、1987年)を参照。
iv 郭錫良『漢字古音手冊』(北京大學出版社、1986年11月)
v 高亨纂・董治安整理『古字通假會典』(齊魯書社、1989年7月)
vi 單育辰「上博五短札(三則)」(簡帛網、<http://www.bsm.org.cn/>(以下同)、2006年4月30日)
vii なお、第五號簡「我曰且蒼蒼乎」・第六號簡「我曰且喬乎」・第七號簡「昔融之是師」という文以外は、みな四字句で構成されている。
viii ちなみに、「聞」は文部、「見」は元部、「畏」は微部にそれぞれ屬しており、これらの押韻とは無關係であろう。
ix 廖名春「讀『上博五・融師有成氏』篇札記四則」(簡帛研究網、<http://www.jianbo.org/>)

(以下同)、2006年2月20日)

x 李銳「讀上博五札記」(簡帛研究網、2006年2月20日)

xi 「𡗗」は、「曹錦炎」は「𡗗」に作るが、「李銳」は反對して以下のように述べる。

按、此字形近上博簡『周易』簡14倒數第三字(今本對應的字作「簪」、帛書『周易』則作「讒」、以及上博簡『緇衣』簡9當讀爲「從」之字又半(郭店『緇衣』簡16作“𡗗”)。

此字筆者曾有討論、劉樂賢先生也結合葛陵楚簡有進一步的研究。

なお、この説は「廖名春」も支持し、「本簡此字似當與「適」無關、具體當如何釋讀及解釋上下文、因爲簡文闕佚、有待進一步研究。」としている。なお、この劉樂賢の説というのは、「讀楚簡札記二則」(簡帛研究網、2004年5月29日)のことであろうが、蘇建洲「初讀《上博五》淺說」(簡帛網、2006年2月18日)は、この劉樂賢の説を引用して以下のように述べる。

劉先生還指出、「最後還想簡略討論一下它的構形。較早討論該字構形的學者、多認爲其核心部件與「帝」字的上端接近、因而懷疑它是「適」字異構、或將其隸定爲從「帝」之字。由于「帝」與今本『緇衣』的「從」及今本『周易』的「簪」讀音不近、此說明顯不能成立。我們懷疑這些字的聲旁可能就是「辵」。說可參。倘若本簡的內容的內容真與伊尹有關的話、則本簡「△」似可讀作「從」、「從湯」、即追隨湯的意思(筆者注：△は當該字を指す)。

このように、蘇建洲氏は當該字の聲符が「辵」ではないかと懷疑している。なお、郭店楚簡『緇衣』第十六號簡の「𡗗」について、黃德寬・徐在國「郭店楚簡文字校釋」(吉林大學古籍整理研究所編『吉林大學古籍整理研究所建所十五周年紀年文集』、吉林大學出版社、1998年12月)は、

我們認爲此字應隸作「𡗗」、釋爲「適」。緇7.37「上帝」、「帝」作「帝」、由「帝」(唐8)訛。緇16此字从「止」、𡗗乃「帝」省訛。

とし、また『玉篇』辵部に「適、從也。」とあることを引用し、通行本『禮記』緇衣篇が「從」に作っているながらも、當該字を「適」と讀爲している。ここでは暫く「適」と讀爲しておくこととする。

また、「廖名春」も指摘する通り、本篇當該字は前文が殘缺しており、どのように讀爲すべきかははっきり言うことができないが、「適湯」という用例は、『新序』刺奢篇に、

桀作瑤臺、罷民力、殫民財。爲酒池糟隄、縱靡靡之樂。……伊尹知天命之至、舉觴而告桀曰、君王不聽臣之言、亡無日矣。……於是接履而趣、遂適湯。湯立爲相。

とある。なお、この文章と近い文章は『韓詩外傳』卷二にも見え、「遂適湯」を「遂適於湯」に作っている。これら『新序』刺奢篇・『韓詩外傳』卷二の用例における「湯」も、また殷王朝開祖の湯王を指している。よって、この『融師有成氏』の「𡗗(聞) 𡗗(適) 易(湯)」における「易(湯)」もまた湯王を指していると考えてよいだろう。